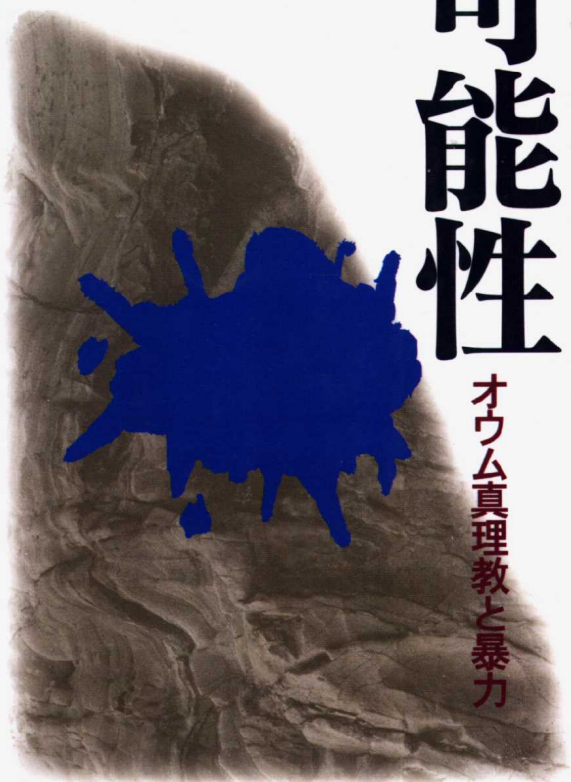


現代宗教の 可能性

オウム真理教と暴力



叢書
現代の宗教 ②

島園進

岩波書店



叢書
現代の宗教 ②

現代宗教の可能性

オウム真理教
と暴力

島 菌 進

岩波書店

現代宗教の可能性

現代の宗教 2

1997年7月7日 第1刷発行

1998年11月5日 第2刷発行

著者 しま ぞの すすむ
島 蘭 進

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000

印刷・精興社 カバー・錦印刷 製本・桂川製本

© Susumu Shimazono 1997

ISBN 4-00-026072-3

Printed in Japan

Ⓔ日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写は、日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得てください。

叢書 現代の宗教

(全 16 冊)

-
- | | | |
|----|-----------------------|-------|
| 1 | 現代社会と宗教
宗教意識の変容 | 大村英昭 |
| 2 | 現代宗教の可能性
オウム真理教と暴力 | 島蘭 進 |
| 3 | 死の比較宗教学 | 脇本平也 |
| 4 | 宗教経験と身体 | 湯浅泰雄 |
| 5 | 芸術と宗教 | 持田季未子 |
| 6 | 宗教と科学的真理 | 垣花秀武 |
| 7 | 奇跡を考える | 村上陽一郎 |
| 8 | 超能力と霊能者 | 高橋紳吾 |
| 9 | 現代医学と宗教 | 日野原重明 |
| 10 | エコロジーと宗教 | 間瀬啓允 |
| 11 | 女性と宗教 | 大越愛子 |
| 12 | ポストモダンの政治と宗教 | 土屋恵一郎 |
| 13 | イスラームと近代 | 中村廣治郎 |
| 14 | 仏教と科学 | 松長有慶 |
| 15 | カルトの諸相
キリスト教の場合 | 井門富二夫 |
| 16 | 自然宗教の力
儒教を中心に | 池田秀三 |

2, 1700 円 他 1500 円

定価は表示価格に消費税が加算されます 1998 年 8 月現在

目次

序 現世主義と暴力性 1

宗教と暴力／「宗教の相対化」と暴力／宗教と現世秩序／オウ

△真理教の暴力と日本の宗教伝統／要約

第1章 暴力の正当化 21

1 暴力批判の立場 22

2 「悪魔の陰謀」と「情報操作」 28

3 タントラヤーナ 40

4 ヴァジラヤーナ 49

第2章 暴力を誘ったもの	69
1 現世拒否と終末予言	70
2 ヴァジラヤーナの教えと終末予言	78
3 グル崇拜と技術主義	88
4 自己変容と自己滅却的現在没頭	100
5 内向性と集団行動主義の結合	111
第3章 現世主義から暴力へ	123
1 阿含宗から受け継いだもの	124
2 ヨーガの実修とその粹づけ	139
3 現世否定と生活世界からの疎外	149
第4章 現代宗教の可能性	165
1 現世主義の空洞化	166
2 超越の頽落	175

結 語	195
3 現代宗教の可能性	185

序章 現世主義と暴力性

宗教と暴力

ハーヴィー・コックスは現代的な状況の下で、キリスト教がどのようにその宗教的生命を開花させうるかを問うた問題を、次々と刊行してきた現代アメリカの著名な神学者である。たとえばカウンターカーチャー華やかなりし一九六九年には「愚者の饗宴——「遊び」と「祭り」の神学」を、若者中心の新宗教がカリフォルニアや全米の大都市をにぎわした一九七七年には「東洋へ——現代アメリカ・精神の旅」を、世界的な宗教復興が注目されるようになり、解放の神学が話題をよんだ一九八四年には「世俗都市の宗教」を刊行して、多くの読者を得てきた。⁽¹⁾ そのコックス氏は「宗教と暴力」と題された最近のエッセイを、次のように書き始めている。

暴力という点について、これまでに宗教が残してきた記録は、せいぜいのところ両義的(ambiguous)といわなければならない。西洋文化の基盤をな

(1) ハーヴィー・コックス「愚者の饗宴——「遊び」と「祭り」の神学」(志茂望信訳)新教出版社、一九七一年。同「東洋へ——現代アメリカ・精神の旅」(上野圭一訳)平河出版社、一九七九年。同「世俗都市の宗教」(大島かおり訳)新教出版社、一九八六年。コックス氏の著作の多くは神学的評論でもよぶべきもので、アメリカ宗教界の課題意識の動きを知るのに役立つ。ここでの引用もその限りでのものである。なお、本書では現存者の姓だけを記すときのみ、敬称を付すという方針をとっている。

すキリスト教とユダヤ教もちろん例外ではない。この両義性はときにグロテスクともいえるような出来事を引き起こすまでに至る。⁽²⁾

コックス氏がまず念頭に置いているのは、一九九五年のアメリカで同日に起こった二つの出来事である。一つはカトリック司祭志望のある男性が、ニューヨークの妊娠中絶クリニックで従業員二人を射殺したという事件。そしてもう一つは、あるカトリック司祭が核兵器施設での非暴力抗議行動で何度目かの拘束を受けたという出来事である。このように宗教は人を暴力の増幅の方向へと導くことも、逆に非暴力の方向を指し示すこともできるというのが、コックス氏が「両義性」という言葉で指し示そうとすることである。

コックス氏が「宗教と暴力」という問題が重要だと考えるのは、主にアメリカ国内の出来事に触発されたからではない。氏の筆は直ちに世界各地の出来事へと及んでいく。

数か月後、東京の地下鉄で毒ガスが放たれたが、容疑はもっぱら一つの宗

(2) Harvey Cox, "Religion and Violence", in Charles Strozier and Michael Flynn eds., *Genocide, War, and Human Survival*, Rowman & Littlefield, 1996, p. 257.

教集団に向けられた。この集団は仏教の要素に、ヒンドゥー教のシヴァ神信仰と紀元二〇〇〇年の到来についての千年王国的・黙示録的見解とを結びつけたシンクレティックな宗教運動であった。一方、インドではヒンドゥー教徒とイスラム教徒との大規模な暴力的衝突が繰り返されている。なかでもかつてイスラム教徒の王が、ヒンドゥー教徒の愛人を追悼するため⁽³⁾に創設したハイデラーバード市での衝突は凄惨だった。

氏のおける例は、さらにスーダン、パレスチナ、バングラデッシュ、北アイルランドと続いていく。「宗教と暴力」の結びつきを示唆する世界の事例は、スリランカ、ボスニア・ヘルツェゴビナなど、他にもいくつもあげられよう。

コックス氏はこのような「宗教の暴発」に対して、キリスト教のペンテコステ運動⁽⁴⁾の未来に期待をかけるのだが、それは淡い希望にとどまっている。コックス氏の指摘を待つまでもなく、「宗教と暴力」という問題は、現代世界の閉塞を象徴する重苦しい難問として受け止められてきた。オウム真理教事件によって、日本はそうした現代世界の重苦しい難題の当事者に加わり、「宗教と暴

(3) *Ibid.*, p. 238.

(4) ユダヤ教の五旬節を引きつぐキリスト教の「聖霊降臨祭」(Pentecost)に由来する語で、地上に、また信仰者のからだに三位一体の神の「⁽¹⁾」の位格である「聖霊」(Holy Spirit)が降臨し、癒しや特殊能力など具体的な働きを引き起こすことを強調する運動で、「カリスマ運動」ともいう。奇蹟やエクスタティックな体験を重んじるキリスト教の大衆運動として二〇世紀初めにアメリカ、アフリカなどで興隆し、一九七〇年代以降は世界各地のキリスト教のもっとも有力な潮流になっている。

力」のリストの中に堂々と登場する「榮譽」を担うこととなったわけである。

「宗教の相対化」と暴力

「宗教と暴力」のテーマが「民族と暴力」のテーマとともに、たいへん切実な問題と感ぜられるようになったのは、たぶんイラン革命（一九七九—八二）以後、とくに湾岸戦争（一九九〇—九二）以後のことである。困難な中東問題の帰趨が単なる領土や経済の利益問題ではなく、イスラム・ユダヤ教・キリスト教の宗教間対立としての性格を強め、それだけに解決不能な難問と受け止められるようになった。

「アエラ」誌、一九九二年一〇月二七日号は、「利己的遺伝子」Ⅱ「ミーム」を唱えるリチャード・ドーキンスの新しい遺伝子理論に焦点をあてながら、「人はなぜ憎しみ合うのか」という特集を組んでいる。「アエラ」誌のとらえるところでは、遺伝子には自らと同じものを生き残し、繁殖させるための情報を伝えようとする傾向がある。ドーキンスは遺伝子のこの要素を「ミーム」と名づけた。人間の暴力的行動の根はこの「ミーム」にある。自己保存を求める

強いミームが生き残っていくのだが、「民族」や「宗教」はそうした強いミームの表れなのだ。強いミームは敵への憎しみを育てて外部への攻撃性をおおるとともに、内部の結束を固めさせる。——ここには集団的暴力という人類の巨大な悪が、「宗教」によって増幅されてきたとする見方がある。

このように「宗教」こそ暴力性のもっとも有力な源泉の一つだとする見方は、湾岸戦争後の日本でとりわけ人気のある見方となった。一方にイラクやイスラムのイスラム、他方にアメリカやヨーロッパやイスラエルのキリスト教とユダヤ教、これらの「宗教」の憎しみ合いが世界の危機を作っている。こうした排他的「宗教」の暴力性に対して、日本の文化的伝統こそ憎しみを和らげ、多様なものの共生を可能にし、未来の人類文明を指し示すものなのだという考えが好まれたのである。

前記の「アエラ」誌「人はなぜ憎しみ合うのか」特集とほぼ同時期に刊行された、渡部昇一の「かくて歴史は始まる——逆説の国・日本の文明が地球を包む」という書物をのぞいてみよう。⁽⁵⁾ その第七章は「世界の師」としての日本」と題されている。英語学者であるとともに日本史に独自の見方をもつ評論家で

(5) 渡部昇一「かくて歴史は始まる——逆説の国・日本の文明が地球を包む」クレスト社、一九九二年。

もある渡部氏は、そこで、「日本が将来、世界に誇りをもって伝えられるメッセージ」として「三つの日本文化の精神」をあげている。すなわち、(1)自然との共存の知恵を育て、森を大切に自然観、(2)「わが仏尊し」を否定する「相対化された宗教観」、(3)労働を喜びとし、「神様ですら働く」と考える労働の三つである。このそれぞれにおいて、主にキリスト教などの一神教を、そしてときに中国文明を批判し、日本文明がすぐれていると論じる。その議論の運びを詳しく紹介するゆとりは今はないが、「宗教と暴力」の論題に直接関わりをもつ(2)の「相対化された宗教観」をめぐる論点について、その概略を紹介しておきたい。

——「わが仏尊し」ということわざは「自分の信じる対象だけを絶対視することへの批判的表現であり、この言葉が示すとおり、日本人は、宗教を絶対化することをいいことであるとは、これまであまり思わなかつたし、また今も思つてはいない」。しかし、世界には自分の宗教に献身し、いかなる犠牲もいとわないという宗教がある。イスラムはその代表であるが、こうした宗教がいくつも並び立つようになれば、世界中は再び宗教戦争の時代に戻らざるをえなく

なるだろう。地球が狭くなり、異質なものが共存していかなければならなくなつた今こそ、「宗教同士の無益な諍いを防ぐためにも、「わが仏、尊し」という感覚を捨て、つまり自分の信仰を絶対的なものと思わず、ある程度、これを相対化していく」必要がある。

日本では織田信長や徳川家康によつて、西洋啓蒙主義に先立つて、徹底した啓蒙精神が発揮され、「絶対」を主張する諸宗教の排他的戦闘性が抑えられた。ここで達成された宗教の相対化は、ヨーロッパのそれを上回っている。この日本的な宗教の徹底的相対化によつて到達された境地をよく示しているのは、石田梅岩による石門心学である。石門心学では、「まず心というものを第一に重んじ、心を磨くことによつて人間として立派になるということを目標とした。そして、心を磨くためには儒・仏・神のどれでも構わないとした」。こうした宗教の相対化は、鎖国の下、狭い空間の中で共存していかなくてはならないという日本独自の体験から生まれた実感に基礎をもつ。近世以来、定着してきたこの日本的な宗教感覚は、ますます狭くなつてきて諸文明共存が切実に求められていた現代世界において、未来を照らす先駆的なものである。――

以上が「相対化された宗教観」をめぐる渡部氏の行論の概略である。ここでは一六世紀から一七世紀にかけて宗教一揆を制圧して以来、日本の宗教は相対化され、日本文明は「宗教と暴力」の結合という、人類の抱えるアポリアを克服する道をいち早く歩んできたと思なされている。この見方は正しいだろうか。また、もし正しいとするなら、オウム真理教事件のような出来事が起こったのはなぜだろうか。

宗教と現世秩序

渡部氏が諸宗教の相対化と見なしていることは、信長や家康の武力によって達成されたものだった。宗教を制圧するには国家の強大な力が必要だった。だとすれば、日本の「相対化された宗教観」の先駆性とは、近代へと進むにつれて強大となりゆく国家権力が、その世俗的共同性の下に宗教を統制するという事態に求められるのだろうか。これは宗教社会学で「世俗化」(secularization)とか「非聖化」(laicization)とよばれている過程に関わる。⁽⁶⁾しかし、渡部氏はそうした制度面の歴史に触れてはいない。氏が強調するのは、近世社会の成立

(6)「世俗化」や「非聖化」については、フライアン・ウィルソン「現代宗教の変容」(中野毅訳)ヨルダン社、一九七九年・ピーター・バーガー「聖なる天蓋——神聖世界の社会学」(蘭田稔訳)新曜社、一九七九年・カール・ドベラー「宗教のダイナミックス——世俗化の宗教社会学」(ヤン・スインゲドール、石井研士訳)ヨルダン社、一九九二年、参照。

ドベラーは社会のなかで宗教の影響力が弱まっていく過程を指す「世俗化」の概念のさまざまな含意をより分けているが、とくに制度面で経済、政治、教育などが宗教から自立していく過程を「非聖化」とよんでいる。非聖化のもっとも大きな結

期以後に広まった、日本人の宗教性そのものの特徴である。すなわち、石田梅岩の石門心学に見られるように、諸宗教から等しく学びとれるとしつつ、「心を磨くこと」によって人間として立派になるということを目標と」するような宗教性である。

渡部氏が「相対化された宗教観」とよぶものは、近世以後の日本の宗教の、(1)他宗教・諸思想に対する寛容の精神と、(2)日常的な道徳や修養実践により「心を練る」ことを重んじるような現世主義的性格であり、この両者が関連し合ったものと見なされている。現世主義や宗教的寛容が、日本の近世や近代の宗教の主要な特徴の一部であるというのはそのとおりであろう。⁽⁷⁾問題はそうした宗教性が、渡部氏が言うように暴力性と反対の方向を指し示しているといえるのかどうか、という点である。

この点は「徳川の平和」や「戦後日本の平和」をどう評価するか、という問題に深く関わっている。日本思想史研究者の黒住真は、「戦後日本の平和」は「徳川の平和」の構造を引き継いでおり、真の「平和」とは言えないようなものと見る。⁽⁸⁾「徳川の平和」は豊臣秀吉による刀狩りを土台としている。刀狩り

節点は「政教分離」である。

(7) 渡部氏は「日本的啓蒙主義」や「人間中心主義」の語を用いており、「現世主義」の語は本書のキー・タームの一つとして私が用いる用語である。本書で現世主義というのは、来世や彼岸ではなく現世での幸福に高い価値を置くとともに、家族生活や政治経済の場である世俗生活においてこそ深い精神的修練がなされるとする考え方を指す。「あの世」の方を向いていた宗教が「この世」に力点を移すのが「現世主義化」であるが、そうすると宗教のなかの「超越」の契機が弱められることになる。渡部氏が取り上げている「宗教的寛容」も「宗教と暴力」に